

「^{どう}道^ち智^{みち}道」補完資料

- 【 補完資料－1 】 神仏習合一大聖地・聖域のこと
- 【 補完資料－2 】 陰陽五行説と^{えつきょう}易経のこと
- 【 補完資料－3 】 月山～旧「道智道」の古今風景（替え歌）のこと
- 【 補完資料－4 】 山形新聞に掲載された旧「道智道」関係者踏破の記事

【 補完資料－1 】 神仏習合一大聖地・聖域のこと

後記【補完資料－4】掲載の新聞記事の内容は事前を知っておいて、この度の旧「道智道」スルーハイクを終えて帰宅後、改めて同記事の内容を見るに付け、次の点がさらに気になって来ました。

- ? 1 ; 大正期に発行されたという『大日本帝国陸地測量部』地図のこと
- ? 2 ; 同記事には無い土壇のこと
- ? 3 ; 今も現存するという移設された社殿の現況のこと
- ? 4 ; 「古峯神社」石碑のこと

そこで、本スルーハイク終了3日後の2017（H29）年8月31日（木）白鷹町伊藤隆さんを訪ね、さらなる情報を入手した上で同日、引き続き翌9月1日（金）、以下に記述の現地に行つて来ました。

今、着目している地点は旧日影・旧中平の集落とその間の区域です、外観図 H11－1 のとおりです。

この注目地を拡大した概況が次ページ図 H1－3 のとおりです。今はこの全域が山中です。もちろん、



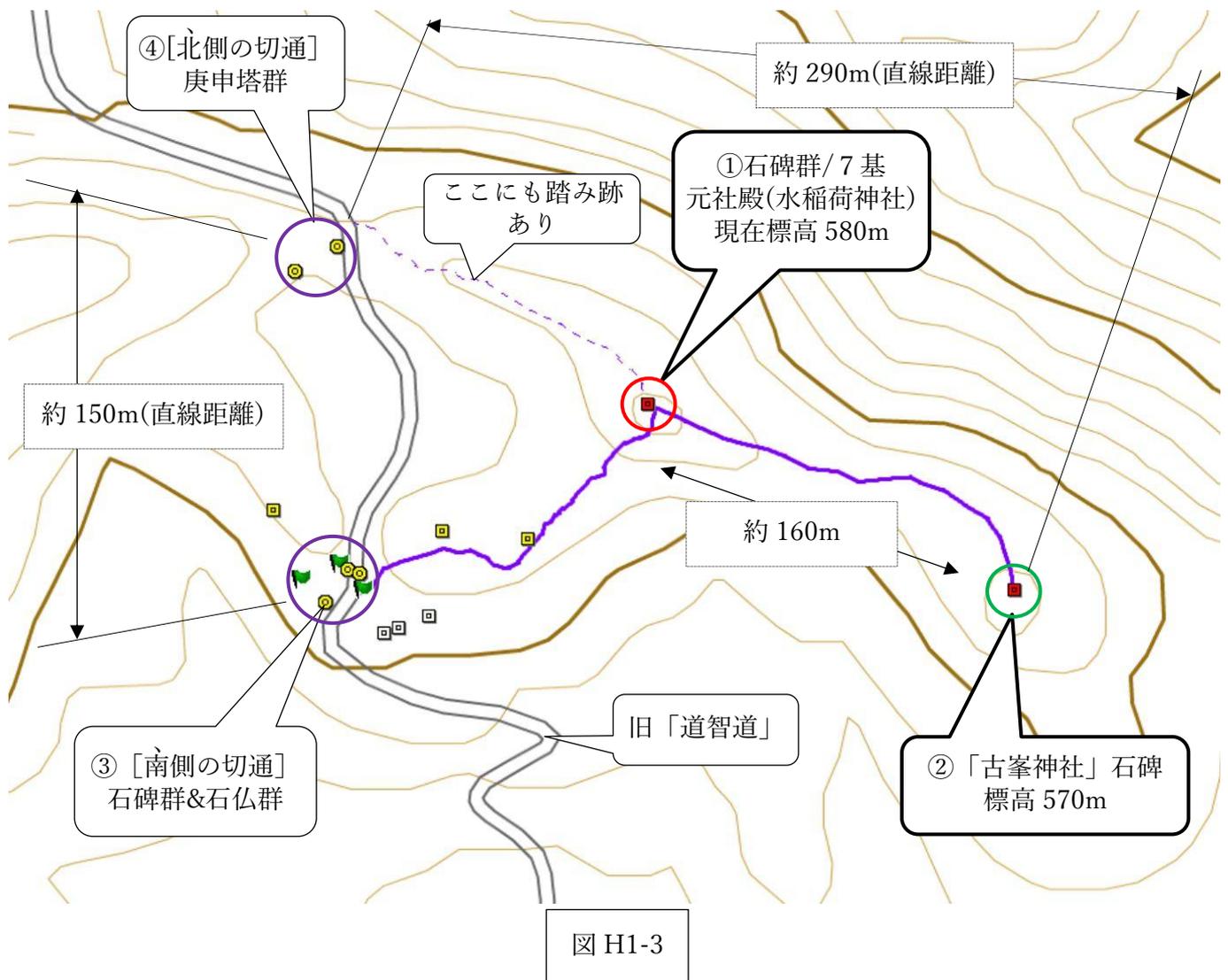
図 H1－1

民家は一軒もありません。この地域がまさしく一大聖地なのです。この中で、同図①と②の所に焦点を当てて、図 H1－2 の対比構図を念頭に、聖域という理由等について以下記述して行きます。この中で、陰陽五行説が絡む「北（方）を水気とし、南（方）を火気とする」北南軸（子午線軸）が気になります、そこで陰陽五行説と易経えつきょうの知識が少しあるとより理解度（想像力）が深まることから、【補完資料-2】に別記します。

A	B
①	②
石碑群 7 基 元社殿（水稻荷神社） [水気]	「古峯神社」石碑 [火気]

C ; ①②共通 物(石碑)は[南向き] (拜む人は北向き)

図 H1－2



1. 「A ; ①石碑群 7基、元社殿(水稻荷神社)、 現在標高 580m」地点のことについて

この地を拡大したのが次ページ図 H1-4、前ページ図 H1-3 中③点の道路切通し個所は図 H1-5 のとおりです。なお、図 H1-4 中の二重丸、フラッグ、四角中点のマークは GPS 機器で特定した位置です。この地(区域)は、図 H1-3①点の状況(元社殿、大神宮塔等の 7基の石碑)や③・④点の庚申塔・供養塔・石仏写し霊場や墓地等、少し離れた図 H1-3②点の「古峯神社」石碑(社碑)から見て、周辺集落の住民からは、神仏習合の一大聖地・聖域(地区民全体で様々な祈りを捧げた神仏の集合地)として祀られて来た、齋場(ゆにはは/祭祀・儀式の会場・舞台)として守られて来たのではないかと考えています。その見立ての理由について順次記述します。



図 H1-4



図 H1-5

(1) ①標高 580m地点とその周辺

a. そこに社殿があったという証拠

大正期発行の『大日本帝国陸地測量部』の地図（図 H1-6）を前出伊藤さんのご厚意でコピーを入手出来ました。——これで“？1”が解決しました。——この地形図は、大正二年二月二十八日発行のものであるが、確かに神社の印が記載されています。（旧）日影・中平の集落名、ならびに、家屋の印も明記されています。なお、当時のピークは標高 579m のようでした。しかし、別途、昭和六年のものには、神社の印は省かれ記載されていないということを確認済みです。

b. 現地の状況

(a) 石碑 7 基

次ページ図 H1-7 写真のとおり
の石碑 7 基（内 1 基は倒伏）が
安置されています。その石碑群
がある土地は、大ざっぱに
25m 四方の広場となって
2 段に整地されていまし
た。同地図には神社の印が
ありますが、【補完資料
- 4 (P28)】掲載の記事によ
ると、そこ（石碑の前）には
社殿があったとい
うのです。あったと云われ
る後記図 H1-12 写真の神
社の大きさであれば、設
置するには（人の参集も含
め）十分に広い平坦な土
地であります。

そして、同 7 基の石碑は横一
列、ほぼ真南向きに安置さ
れています。拝む人は真北を
向きます。

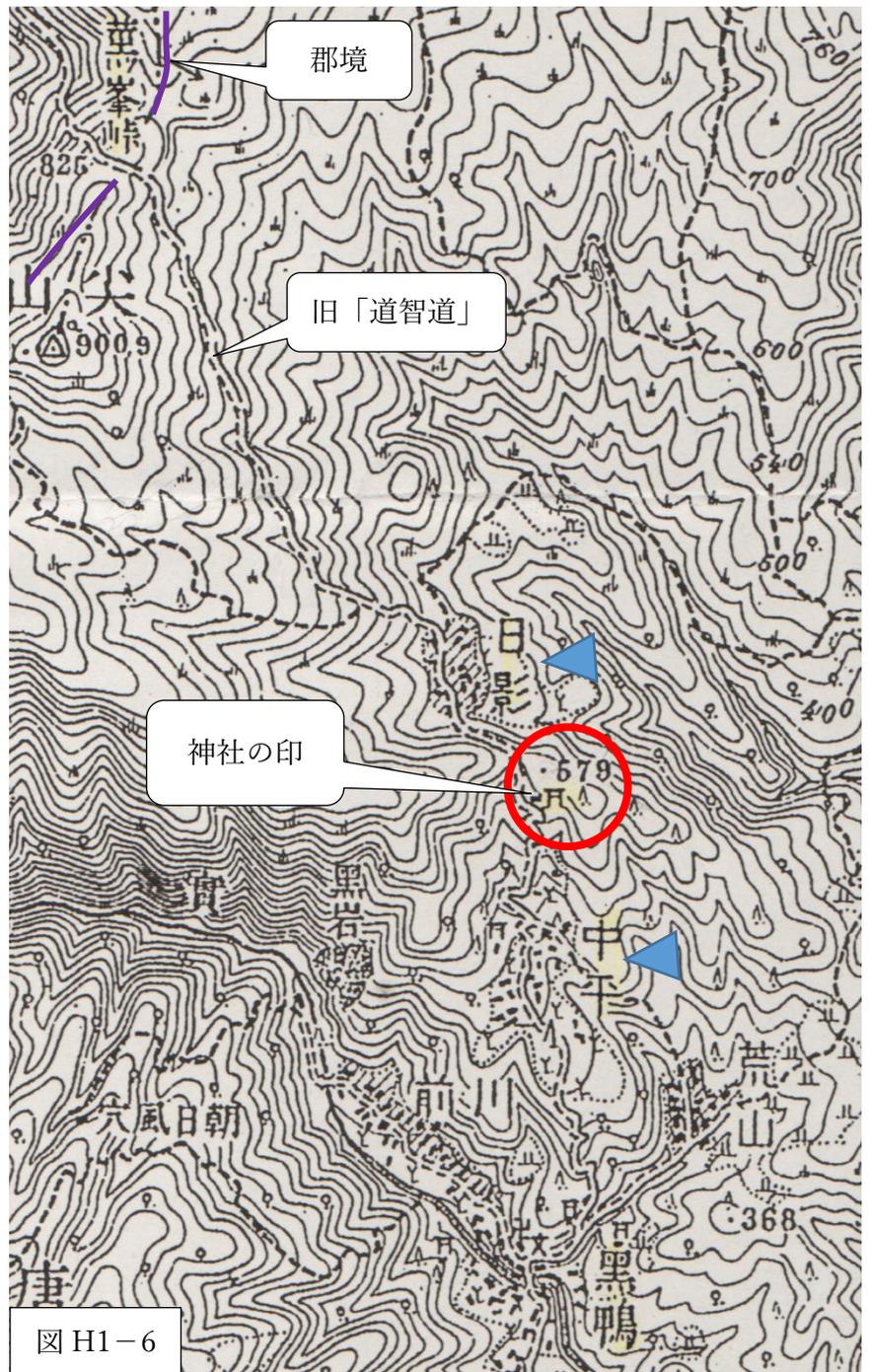


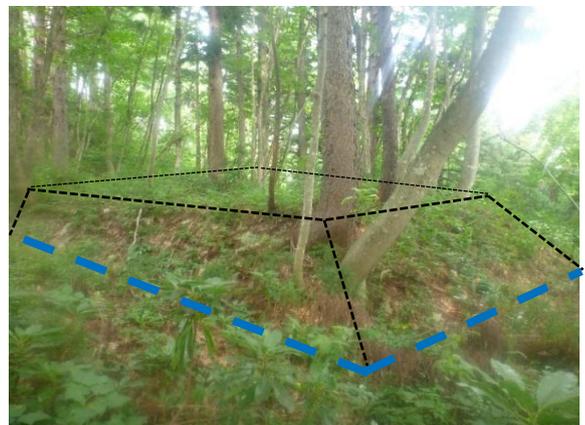


図 H1-7

(b) 土壇のこと

私が、旧「道智道」スルーハイク当日に確認したのは、標高 580m ピークより南西方向約 70m の所にある図 H1-8 のとおりの 1 個所 (10m 位四方) ——図 H1-4 においての『□1』——のみでしたが、同伊藤さんから入手した情報のとおり、同様の造りの土壇が他に 2 個所 (1 個所目と同様の四角造り、大きさは 1・2m 大小あり) ——図 H1-4 においての『□2、□3』を後日現地確認しました。——これで“? 2”が解決しました。

その土壇は、自然な水平地形の下部四方を、雨を流すために掘削、樋状にし、整形した状態にあります——^{しゅうごう}周壕 (堀) が巡らされている状況です。同伊藤さんから聞く処によると、使用目的は判然としないが、何かの儀式で使用したのではないか、という見方もあるとのこと。



□1 同ピーク南西下方の 1 個所目の土壇

図 H1-8

その「儀式」というヒントから私が思うに、現地で次の 4 点くらいが想像出来ました。

- ✓ 1 ; 神社の祭典・祭礼において、神楽や獅子舞などの舞台としたのではないか。
- ✓ 2 ; あるいは御旅所 (神社の祭礼において神輿に乗せた神様が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所) だったのではないか。
- ✓ 3 ; はたまた相撲土俵 (相撲は、元々は日本固有の神道に基づいた神事であり、祭りの奉納の一つとして行われたもの) などではなかったのか。
- ✓ 4 ; 護摩壇 (護摩修法儀式的祭壇) だったのかもしれない。(これが濃厚か?)

ただ、3 個所もなぜ必要だったのか、という疑問があります。思うに、

- ✓ a ; 伊勢神宮の式年遷宮や出雲大社の大遷宮のような隣接地への定期社殿更新に鑑みて、祭りにおける神の降臨齋場 (憑代)・御旅所としての祭壇をここにおいても毎年場所を変更した。
- ✓ b ; あるいは祭りの主要会場としての持ち場を地区 (集落) で分担したなど。

様々な理由があったのかもしれませんが。私の凡才で勝手な想像も楽しくなります。

(c) ③道路東側枯松足元にある多数の石仏のこと

図 H1-9 のとおりで、この度は草木の繁茂でよく見えないことから 2015 (H27) 年秋撮影の写真です。あれだけ多数の石仏が横たわっているので、また、形からしてどこかの観音霊場の写し霊場ではないかと想像していたが、この度、現地に図 H1-10・11 写真のように、「當國三十三所」と刻字された二つの石碑を確認したことから、案の定となりました。石仏は、首を落とされずにきちんと残されています。それでは、「當國」とはどこか？ きっと「置賜」であり、したがって「置賜三十三観音」の写し霊場でしょう。当時は、この聖地一带に順礼・巡礼の気分を味わえるように点在配置されていたものと想像できます。そして、廃村に伴う後始末の過程で、ここ一個所に集められたものではないだろうか。



図 H1-9



図 H1-10



図 H1-11

(d) ③④道路西側南北の石碑のこと

大神宮（道に落ちて裏返しになっていた）、庚申塔、供養塔、南無阿弥陀仏、その他裏返しになった石碑2基がありました。

(e)「大神宮」碑のこと

標高580m地点に3基（7基中）と上記（d）1基の計4基があり、全体からすれば一番多いが、当時は如何に伊勢神宮に対する信仰心が篤かったかということが窺われます。

.....

同伊藤さんによると、図H1-5のように切通しになっているが、道路開通工事で機械が入って開削していることから、石塔類はいろいろと移設されているだろうということでした、頷ける状況にあります。

思うに、日本古来の民族信仰の基層には、簡潔に言うと、人は死ぬとその霊は里山でしばらくの間供養され、人々の供養を受けながらやがては昇華・純化し、少し奥の中山に、最後には祖霊神として崇められ深山に籠り、時として、山の神となり、田の神となり、生きている人々の近くまで飛遊すると云われるが、ここは、旧日影・旧中平の集落の両村にとってはまさにその中山・深山としての聖地だったのでしょう。それらは、ご先祖はすなわち神仏かみほとけのご加護を期待して祀ったものと思います。

(2) 元社殿（水稻荷神社）は現存

私が名称付けしたこの聖地一帯で、齋場さいじょう（ゆに）の中核を成したと思われる元社殿のことについてです。【補完資料-4 (P28)】の新聞記事によれば、現標高580m地点において、石碑の前にあったとされる社殿は、『道の駅白鷹ヤナ公園』駐車場北端に現存しているというのです。そこで2017(H29)年8月31日（木）現地に出向き確認しました。その結果は図H1-12写真のとおりで、「正一位 水稻荷神社」という名称になっています。大きい社殿は屋根幅で約幅3.6m×奥行4.6mの大きさ、内部に「御幣」が祀られています。なお、右側奥の小さな社殿の内部には不動明王が祀られていたが、大きい方とセットのようです。――これで“？3”が解決しました。



図 H1-12

現社殿の前には図H1-13のとおりの説明版が掲示されています。元の位置との明らかな関連では、「日影」の文字があり、旧集落名の一つです。元々の神社名は不明ですが、同版冒頭に御祭神は「火と水の神」とあります、これは動かしがたいと思うので、元々の神社の名称の詮索は無意味というものでしょう。「正一位」という神階最高位の称号が冠されていることから当時も「水稻荷神社」であったことでしょう。なお、「正一位」は稲荷神社の異称のようになったということです。多く（複数）の天神地祇を合祀しているが、いかにも大和の国、誇るべき多神教の日本らしい。それにしてもこの社殿は何回も移転しているようです、流浪の旅をしたようです、なぜなのか？

正一位 水稻荷神社 由緒

御祭神

此花俵夜比売命

火と水の神

正位伏見分社

市杵島比売命

海上・航空

庚申稲荷

巖島大神

交通安全

日影座禪

中筒男命

海路平安

不動明王尊

保倉食命

五穀食物

稲倉魂命

農業商売繁盛

元縣社々司 赤間芳信氏所有 来社正一位中丸稲荷神社
享保元年三月勸請

昭和二十五年十月二十五元點貝村大平、長岡五兵衛所有三回移転
八ヶ森の三森御白山西辺に鎮座後中丸沼地辺に再度移転す
平成三辛未年五月十九日下山当地に移転
新名「正一位水稻荷神社」として奉納する

昔から万物を生成する根源は五行「木・火・土・金・水」
であるとされており、

「この内の四つの動きを包容する水は、汚物を三寸流し
清くして霊水と成り、この世に生きる物が形成されるのも
水の恵みであると言えます。」

その限り無い水の恩恵を受けて育つ若鮎も、又、清き
流れの里最上川に育つ無害の鮮魚であります。

此処「鮎と鮎の里しらか」にあつて、当「あゆ茶屋」が最上
川の力を借りその鮮魚を提供し、町内はもとより遠路遠々
お越し下さった皆様に喜んで頂く事と、社員一同「禄・職
・義」を充足できる喜びに感謝致したいと思っております。

又、御旅行の交通安全と共に皆様がこれからも限り無い
水の恩恵を受けられますよう御祈念申し上げ自然の
恵みへの感謝と敬意の心を結集して、「水稻荷神社」と
して健立致しました。

平成四壬申年 一月二十二日

正一位 水稻荷神社 宮守

当主 白鷹観光開発 兼 あゆ茶屋

別当 覺張璋胤

図 H1-13

なお、稲荷神とは、稲を象徴する穀霊神・食物の神、農耕神です。

ここで「火と水の神」が登場しました、まずは、中央部よりやや左の次のフレーズ——昔から万物を生成する根源は五行（木・火・土・金・水）であるとされており、「この内の四つの動きを包容する『水』は、汚物を三寸流し・・・」——が気になりました。

つまり、『水』は『木・火・土・金』の四つを包容するというのです。それらに付着した汚れを単に落とすだけでしょうか。いや奥深いはず！ どのようなイメージで捉えればよいのか、直感では湧きませんが、少し考察したので後記します。

ところで、「鮎」と結び付けたところは、無理やり後付けした感がありますが、まあ、当該神社を引き受けた処の役得でしょう・・・。

2. 「B ; ②「古峯神社」石碑、標高 570m」のことについて

白鷹町史談会長の丸川二男さんから頂戴していた資料にあった事、ならびに前出伊藤さんから話を聞いていた事を踏まえて、確認したく現地に足を運んで来ました。

場所は図 H1-3 のとおりです。2017 (H29) 年 11 月 3 日 (金)、午前中現地に行つて、石碑を確認しました。その場所まで歩いた軌跡 (GPS 記録) は同図中の紫色実線のとおりです。

当初、580m 地点からの入り口が分からなくて少し思案しました。石碑 7 基が建立されている標高約 580m 地点からほぼ東方に緩やかな尾根を 160m ほど歩いた所でありました。——道筋は明確ではなかったが、かすかな踏み跡があり、葉が落ちているので見通しが良く、迷う事なく到達しました。標高約 570m の小高い平坦な場所でした。現地には図 H1-14 のとおりの立派な石碑が安置・建立されておりました。

裏側には、建立年の「明治廿八年四月一日」(縦書き、明治 28 年は西暦 1895 年) と発起人 3 人の名前が刻字されていました。これで「? 4」が解決しました。

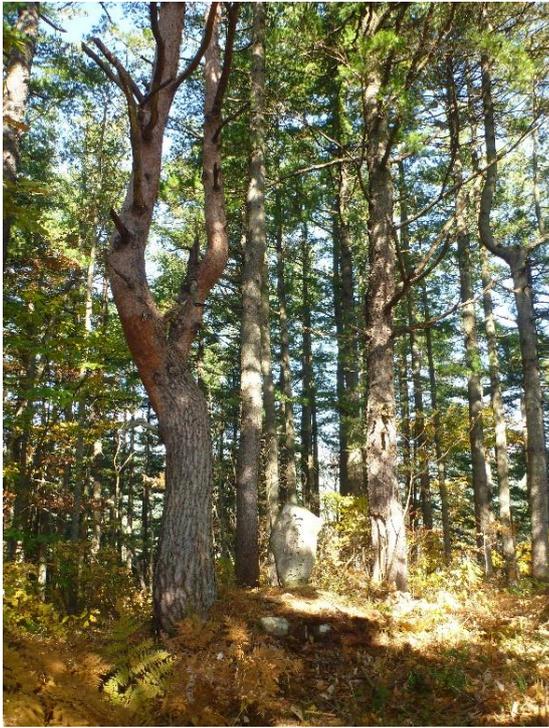


図 H1-14

なお、**建立年の刻字の拡大は図 H1-15** のとおりです。



図 H1-15



石碑・石塔は「たかが石（ころ）」ではあるが、一つひとつは異なった^{かみほとけ}神仏を宿した神社や寺院の縮図、一つの地域の文化・歴史を凝縮したひな形・模型と理解しております。この古峯碑は建築物ではないが、まさに社殿そのものなのである、と思っています。

「古峯神社」は、一般的に、あるいは古峰神社とも称され、「火伏の神・火防の神」であります、ここでも、文字は真南を向き、拜んだ人は真北向きになるよう建立されています。火を鎮める一方で、火（熱）を求める、つまり、火を制御する火の神様なのですが、その理由などについて後記します。

3. それぞれの設置意義について

(1) 陰陽五行説の火気と水気について

以下の記述に当っては、陰陽五行説に関連します、細部は【補完資料－２】に記載するが、ここでは前記神社に絡むことに絞って触れます。

a. 水気に対する信仰についてです。

次のような水の力（神威力・神通力）に対する期待があります。

(a) なんとと言っても、動植物の生命力維持の基礎となる栄養、血液、酸素を循環させる体液となり、命にとっては最必需の一つです。

(b) 水の基本性質は次のとおり。

- ・その面を常に一定にしようとする力を内在します。
- ・高い処から低い処に流れ移動し水面を一つにします。
- ・高温から低温に移動循環し水温を一定にします。
- ・清濁を選別・排除せずあらゆる物体を飲み込み（包み込み）ます。
- ・相手に合わせ重い物は沈め軽い物は浮かせます。

これらの特質は、別の見方をすれば、異質のものを一つにする、両極のバランスを取る力、異質体（みな）を調和させる力を有している事になります。どんな器にも形に応じて隙間なく埋め尽くします、「水は方円の器に随う」〔韓非子〕です。

b. 火気に対する信仰について

次のような火の力（神威力・神通力）に対する期待があります。火＝熱＝日＝陽＝太陽の範疇は同義の世界です。

- ・¹；この世のどんな物体をも焼き尽くし（消滅させて）灰燼に帰すことが出来ます。
- ・²；その力に念じて精神的には、あらゆる悪霊・穢れ・不吉な予兆を退散・雲散霧消化出来ます。（今にも続く、護摩祈祷と同じ信仰）
- ・³；適度な太陽熱は、大地や動植物に温熱を与え、それらの生命力維持に寄与します。
- ・⁴；太陽熱（火）が過ぎれば、大地に過乾燥や早魃の悪影響、火災の加害を齎します。
- ・⁵；太陽光（熱）は光合成を以て植物の成長を促す、また、その作用を以て空気中から二酸化炭素を吸収、酸素を排出する。

(2) 神社そのもののご神徳について

a. 「水稲荷神社」について

前記図 H1-13 にあるとおり、水を冠しているが、御祭神は「火と水の神」です。敢えて人間に例えるならば、名前とよって立つ思想・哲学のようなものです。お稲荷様に敢えて「水」を冠して拝み祀った理由は、特に『水』の力に期待した（陰陽五行説の）水気に対する信仰からです（でしょう）。水は命はもとより作物の五穀豊穰にとっても必要不可欠・絶対必需のものです、時には天皇自らが雨乞神事を執り行った歴史にも鑑みて、水気信仰は重要であったのです。時には洪水を齎すが、それは潤しの反面ですから、水自身が持つ自己制御性です。もう一つは、火災対策の一つです。前出「古峯神社」は火伏・火防の神様ではあるが、現実の火災に対しては「水」の消化力に頼る他はありません。

b. 「古峯神社」（石碑）について

「火伏の神・火防の神」だから中身は「水の神」と思いたくなるが、そうではありません。この「古峯神社」は、火を鎮める、火の勢いを抑制する、反面、火（熱）を乞うという両面を制御する力を内蔵す

る神様として崇め祀って来たのです。また、人々に火の災いが及ばないようにするという事は、悪い火・
崇る火・忌火を一手に引き受けているという事なのです。よって、表は制火（静圧）で裏は猛火（動
圧）、つまりは地球の営みと同じなのです。平時の地表は静地、時には地震、マントルから火山が噴き出
す動地に変化します。

熱の招来を期待して信仰の対象とした「火神」は、すなわち、火（＝熱＝日＝陽）に対する信仰は太陽
信仰と一体です。太陽神といえば天照大御神あまてらすおおみかみです、そのアマテラスを祀るのが伊勢神宮内宮です。前記
のとおりこの域に「大神宮」——伊勢神宮信仰の証——の石碑が4基も（正確に基数を把握はしてい
ないが、この中の割合としては一番多い感じがします。）あります。

あらためて「古峯神社」の持つ信仰対象を簡単に再確認して置きます。呼び方は「こみね、ふるみね、
こぶはら、こばはら」などと地域によって様々のようです。元々は、あるいは共通するといっても意々か
もしれないが、信仰対象の神徳は「火伏の神、火防の神」です。天狗信仰などとも習合し、海上安全、五
穀豊穰、家内安全・商売繁盛等あらゆる日常茶飯事の開運・除災・心願成就あがの神として崇められて来まし
た。

余談ですが、「火伏の神」自身が住まう社殿（神社）の火災消失はいくらでも事例があります。日本の
神は「神（和魂）と鬼（荒魂）」の対極を同時に内包し、偶にしくじったり、失敗したり、人を祟る鬼
になったり、恐ろしい悪魔になったり、人間にも似て豹変自在なのです。一神教の訓えるような唯一絶対
を正義とし、その独善的な勧善懲悪を徹頭徹尾押し通すような偏屈純粹教ではないのです。

（3）各共通、「物（神社・石碑）は南向き、拜む人は北向き」について

標高 580m 地点の「①点石碑 7 基と元社殿」も、標高 570m 地点の「②点古峯神社」石碑も正面は真南を
向いています。文字が真南向きということは拜んだ人間は真北向きとなります。一大聖地としての存在意
義を成す象徴物が同じ南向きです、これには必ずや意味があると思います。

陰陽五行説ならびに易経の訓える処に由来すると考えています。それは、南北の子午線軸——北の水
気、南の火気——を強く意識したからだと思われています。それらを考慮に入れつつ設置方向を決めた
のではないかと思います。その根拠について推量して見ます。

元社殿の向きは判明しませんが、図 H1-3 の現地において、旧「道智道」から主道を踏んで上がって行
くと、平地の直前では真南から真北に向けて突き上げてその広場に到達する状況にあります、よって元社
殿は（も）真南向きに建てられていたことは間違いのないと思います。また、元社殿（水稻荷神社）の御祭
神は、前記のとおり「火と水の神」としているが、水気に加えて「火気」に対する信仰も込められていた
ものです。

それらからいずれにしても、陰陽五行説の南は「火気」、北は「水気」を強く意識して、設置したもの
と考えています。

また、古峯神社の南向きは「火伏の神」自身に火のエネルギーを蓄える、より強大にするために、神そ
のものである刻字が「火気」の方向を向いている、向いて「火気」の充満を浴びる、という事でもありま
しょう。火は時に火事で暴れる一面を持つが、反面、温熱や煮炊きには必需のものです、これらは火自身
が持つ自己制御性です。

ところで、落ちると恐ろしい雷を嫌いますが、それは激しい光（火）を伴うからです。反面、水を呼ぶ
神様としても崇められています。対極にある火と水の両方を内蔵することから、怖いものの対極にある善

神として、これを「雷神」と称しています、対極にある火と水を同時コントロールすることに期待を込めて信仰の対象としています。

4. 設置位置の意義について

自然の地形を絶妙に利用した先人の知恵に感嘆します。先の図 H1-3 をあらためて眺めて、まず、550m 等高線を結んで見直したのが図 H1-16 のとおりです。西北方向に何か口を開けている様子です。「^{こぶほら}②古峯神社」を「①水稻荷神社・石碑7基」と並べないで、あるいは同敷地内に設置しないで、なぜ、わざわざ、160m も東方に離して設置したのか、また、図 H1-3 の③と④の石碑群との関係は何を意味するのか、という疑問が出てきました。

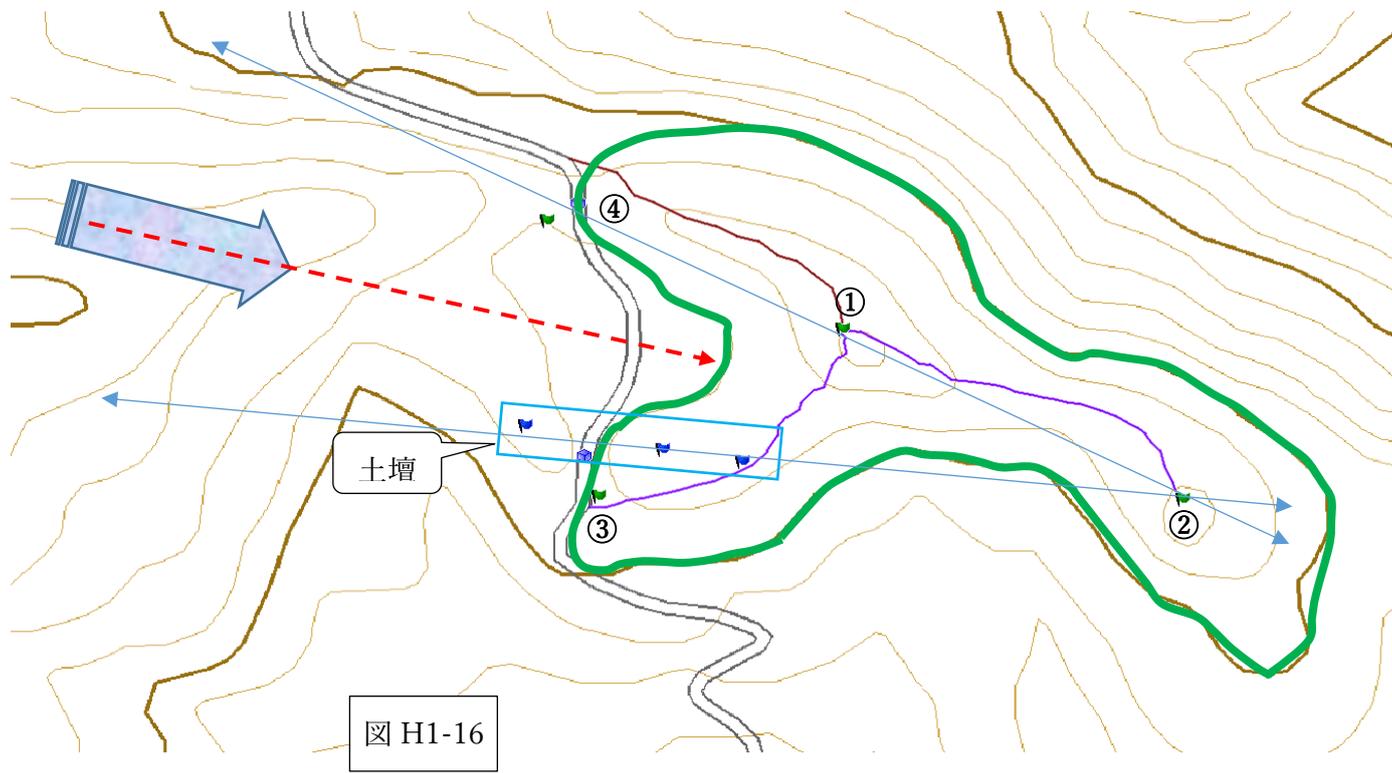


図 H1-16 を^(※)トポロジー視点からデフォルメ化^(※簡略化)すると図 H1-17 のようになります。^(※)数学の一分野の位相幾何学、元の形を切ったり貼ったりせず変形すること。

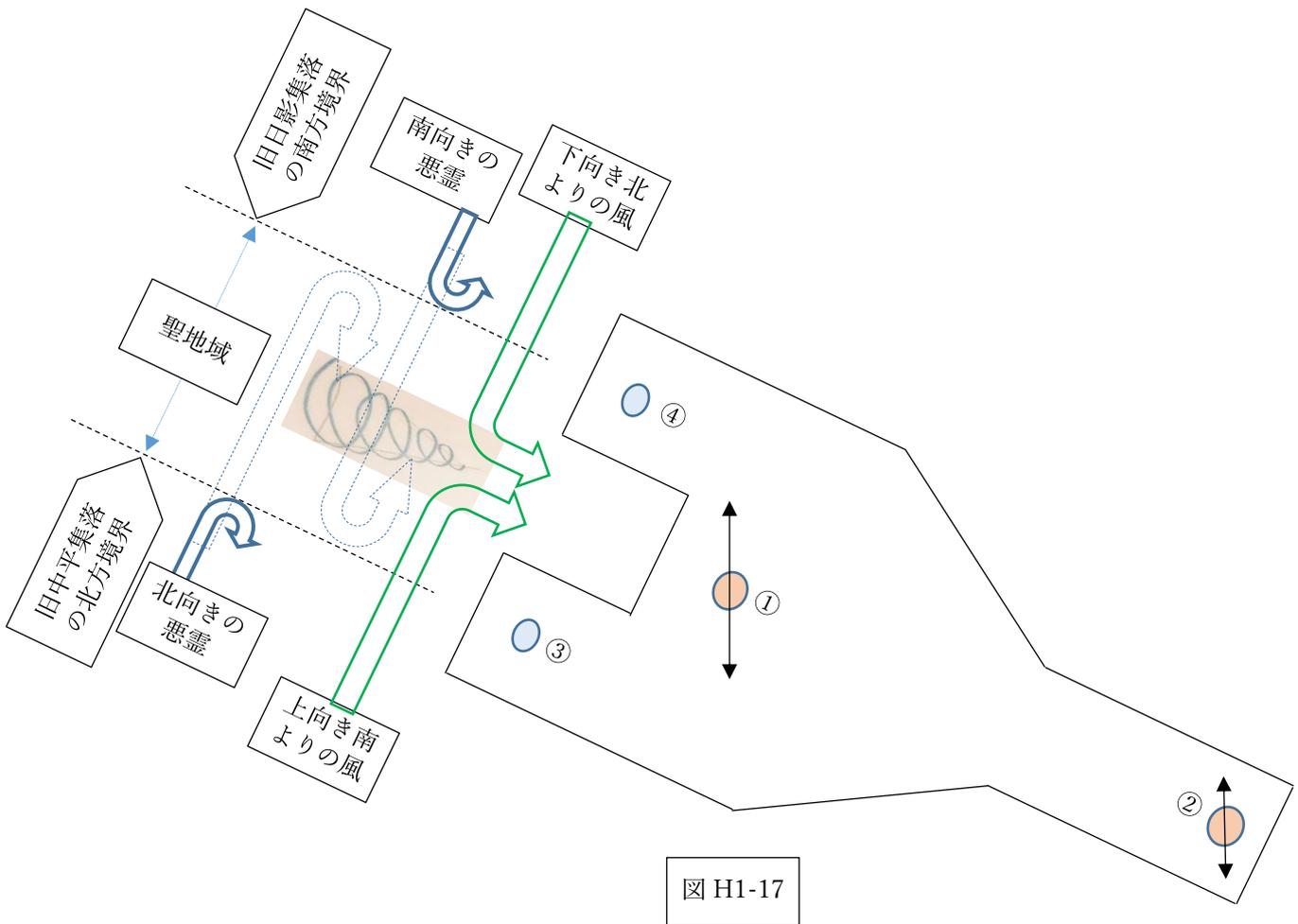
まずは、図 H1-16 と図 H1-17 を重ねてイメージします。なお、「西北」の方角について参考となる数点のコラムを、後記の図(表)H1-19 に記載します。

上記疑問の解決には様々な角度からの論考が必要と思われるが、浅才非学の身ながら勝手に以下の4点(㊦~㊧)を想像して見ました。

㊦；風に対する信仰です。西北の中口大陸から吹いて来る北西の風は、吾が国土にとって特に冬期間は厳しいものがあります。風には雷神が乗って（紛れて）来ます。しかし一方で、風は農作物や大地を乾燥させる自然の力も有します。風には善悪両面を持っています。したがって、退散させる、封じ込めるという手法ではなく、一層の事、呑み込んでしまう考えに立ったのです。利活用の取捨選択と防風対策の知恵は、図 H1-3 の配置において、①③④域の神仏の靈魂の活躍で対応したのです。

㊧；悪霊の消化・浄化に対する信仰です。集落の人々は、外部からの悪霊の侵入防止のために隣接域との境界に供養塔・庚申塔等を配置したが、北方の旧日影地区と南方の旧中平地区の境界に当たるこの地の③

域と④域の石塔を見ればその事実がそれを裏付けしています、いわゆる結界の設定です。しかし、それと



て完璧では無いだろうから防御態勢を潜り抜けた悪霊に対しては、次のようなストーリーを以て神威・仏光のエネルギー（呪術）を以て退治したという事でしょう。

侵入して来た善霊（和魂）や悪霊（荒魂）は、③・④と①稲荷大明神（水稲荷神社の権現）の力で以ってここで噛み砕き粉碎し篩ふるいにかけます、善霊は善魂（和魂）としてこの神仏霊はそれを蓄蔵し神威力・仏光力を増します。一方、砕いた悪霊はスルーパスして（水に乗せて）後方に流してやります。そこで後方に鎮座している「古峯神社」の神魂は持てる「火の力」を発揮し、その悪霊を焼き尽くし消滅させてしまいます。なお、土壇は下歯の牙の役割なのかもしれません。

その流れは「大祓詞おほはらえのことば」から想像したものであります。人が罪穢れの祓を神に祈ると、瀬織津比賣せおりつひめ⇒はやあきつひめやじるしいぶきどぬしやじるしはやますらひめ速開都比賣⇒気吹戸主⇒速佐須良比賣と、持ち場立場の神様がその役割を果たして、リレー・バトンタッチして行く中で祈り手（人間）の罪穢れは雲散霧消・消滅してしまうというのであります。

いわば「②古峯神社」に対して、図 H1-3 の①・③・④に祀った神仏靈魂の守護神としての役割を与えた、したがって、全①・③・④の靈魂を包括し見守る形を取るために、敢えて後方に位置取る当場所に配置させたのではないかと想像しています。

換言すれば、前衛に立地の「水稲荷神社」の火気力に対しては、破碎力を期待し、後衛に立地の「古峯神社」の火気力に対しては、壊滅（完全消滅）力を期待したのです。いわば、前者には火気コントロールを副業として、後者には火気コントロールを本業しての使命を与えたということでしょう。

⑦・①に関し、陰陽道では、西北は天門からの魍魎の侵入対策として、方位除けの神や神社仏閣を

置いて守って貰うのです。つまり、門番を置いたという信仰があります。この信仰にとっても類似しています。

㊦；子孫繁栄に対する祈りです。図 H1-17 についてデフォルメ化をさらに強めて人体化したのが図 H1-18 であります。凹部（女）は凸部を欲しがります、凸部は北西の風や荒魂^{あらみたま}の化身（男）です、その交渉は凸凹の合体（③と④は睾丸）の形に進展します。精子と卵子の結合は命を作り、水（体液）に保護されて母体の腹に宿り成長します。いずれにしても命の育みには火（エネルギー）とそれを調節する水が必要です、実に理に適っている構図になっています。

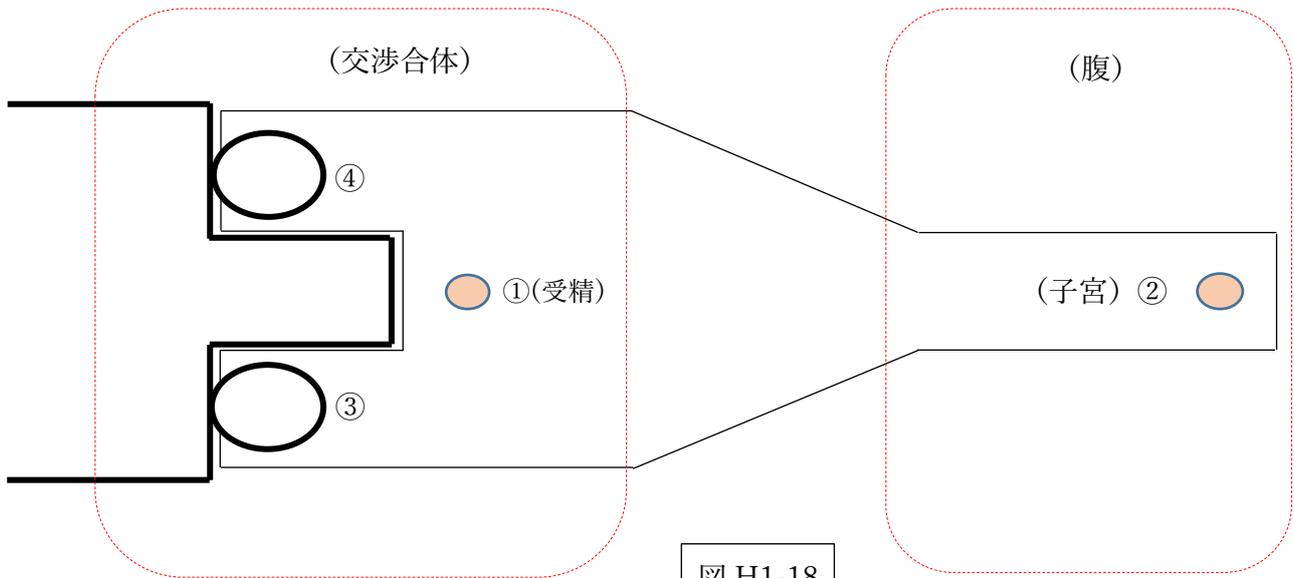


図 H1-18

㊧；金気に対する祈りもあります。西北方向に口を開けています、五行説では「西」方位には「金気」と、季節は実りの「秋」を配当しています。西方浄土にも繋がります。

地形を上手に利用して、五穀豊穰の実りや人間の真っ当な営みへのご褒美としての金銀財宝の入手を託した祈りの場でもあったのでしょうか。

だったら、①石碑群を拝む時は真西を向くように配置しなかったのかという疑問が湧きます。そこは敢えて明瞭にはしなかった、と思うのです。つまり、古来より日本民族はその性格として、神仏^{かみほとけ}に対して^{あからさま}明白に、露骨に金銀財宝・金銭を要求するような祈願はしなかったのです。日常の暮らし方の因果応報として、結果して祈りが金銭に結び付けば良いのです。

【コラム】「方位」のこと・・・インターネット（ウィキペディア・コトバンク等）から

その1；陰陽道の「天門」とは、北西の方位の事である。天帝（道教の最高）が住まう宮殿の門である。他方、天門は怨霊や魑魅魍魎が入ってくる凶方位ともいう。つまり、この世は善いことだけでは無い、悪いことだけでも無いという捉え方をする。

その2；天皇の四方拝について（世界大百科事典 第2版の解説より）

年の初めに天皇が天地四方に拝して年災を祓い、幸福無事、五穀豊穰を祈る儀式。清涼殿東庭に屏風八帖を立て、中に高机三所を置き、香炉と灯台（燭台のこと）と造花を供え、天皇は、北に向かって、次いで天、西北に向かい、次に四方、山陵を拝する。

（細かい儀式を知る由もないが、今も毎元旦に「四方拝」を執り行っている。）

その3；北東の鬼門以前はこの北西が恐れられていたという。北西風を「アナジとかタマカゼ」と称し、悪霊とともに善神も来る両義的な方位とし、屋敷では稲荷を祀って来たとの事です。なお、「タマカゼ」のタマは「霊」で、特に東北・北陸地方の日本海沿岸では、冬に北西から吹く暴風をいう。

図(表)H1-19

5. まとめ

(1) 図 H1-13 説明版の「・・・この内の四つの動きを包容する水は・・・」のところについてですが、この『四つ』とは、水が相手とする『木・火・土・金』です。【補完資料－2】を参照のこと。

① 水と木との関係を見ると、表は公説「水生木」の相生関係となる。【補完資料－2】の⑤

② 水と火との関係を見ると、表は公説「水剋火」の相剋関係となる。【補完資料－2】の㉔

③ 水と土との関係を見ると、表は公説「土剋水」（【補完資料－2】の㉕）の相剋関係であるが、私説、その裏力（陽中陰あり、陰中陽あり）が増せば、「水生土（水は岩石を砕いて土を作る）」の相生関係に転換して行く。

④ 水と金との関係を見ると、表は公説「金生水」（【補完資料－2】の④）の相生関係であるが、私説、その裏力（陽中陰あり、陰中陽あり）が増せば、「水剋金（水に長く浸たされた金属は錆びる＝水は金属を錆びさせる⇒水は金を溶かす）」の相剋関係に転換して行く。

水に焦点を当て、あるいは水を中心に、この四つの相対（待）性原理を見ると、「相手を生む（援ける＝相生・肯定指向）」にしても、「相手を剋する（傷め付ける＝相克・否定指向）」にしても、いずれの場合も、水が主役となって相手と関係性を持つと理解出来ます。言い換えれば、大きく鳥瞰的視点からは相手を包摂していることとなります。

(2) 社殿の水稲荷神社（水神）と古峯神社（火神）と此花佐久夜比売命（火と水の神）がきっかけとなり、独我の勢いでいろいろと想像が掻き立てられます。

水と火の神を祀って来たその心を総括的に見ると、水と火との関係において、攻守処を変える表裏の関係性を見出して、不離一如のその靈力に感謝を表して来たのです。まさに、陰陽五行説のいう「陽中陰あり・陰中陽あり」で、強弱、優劣がぐるぐる入れ替わるからこそ、森羅万象に、生命誕生や淘汰が、栄枯盛衰や均衡が生まれるのだという訓えの実践ではなかったかと思っています。

作物も動植物も人間も、日照と降雨に対してはほど良い働きを期待します、そのための火と水の調和を願って止まなかったのです。人々は、それら「火や水」の持つ力を最大限に引き出すためには、中国から伝わって来たとは言え、当時は政治的思惑とは関係なし、その訓えに大和民独の解釈を入れて利用したということでしょう。水は火を消す(剋する)ことが出来ます、しかし、立場を変えて、火は水を蒸発させる(剋する)ことが出来ます。どちらも強く、どちらも弱いのです、矛盾ではありません。

火と水に係る神様を、時には対比的に見て、時には同居的に見て、同等化・併存視し、きちんと崇敬していたということでしょう。自然と一体となって生きていた人々は、「今日の不運(例えば、今年の不作)は明日(来年)の幸運(豊作)」を期待し、「今日の幸運(豊作)は明日(将来)の不運(不作)」の戒めとし、地球のサイクルと共に柔軟に対応して来た証でもあるような気がします。

豊作あるいは凶作は個人の所得のみならず邦全体の繁栄・士気に係る事象であり、今様の好景気あるいは不景気と同様に社会にとっては大問題であったでしょう。日照(太陽熱=火気)と降雨(水気)に対してはとても敏感だったでしょう。

こんなことを思う時に浮かぶのが、アクセルとブレーキの話です。時には水は火をやっつけ、時には逆に火は水をやっつけ、犬猿の仲の水と火は、時にはちょうど塩梅よく調和を取ります。押したり、引いたり、陽中陰有り・陰中陽有りです、そのような性質を見極めて人間のあれやこれやの思いを仮託したのです。いわばアクセルとブレーキ、左右を以て上手に操ったということですが。今の人間も変わりはないでしょうが、昔は自然の息吹とより強い一体感・共生感を抱いていたはずですから、私の想像以上に宇宙規模での真剣な祈りがあったのかもしれない。

当時の人々、五穀豊穰、子孫繁栄、村落の安泰を祈り、そのために神かみほとけと一体になる儀式を齋行し、自然との一体・共生の理念のもとに巧妙に仕組んだ一大聖地を大切に守って来たのでしょう。火の神と水の神の神徳をよく理解し、その能力が十二分に発揮されるように綿密な計算の上で配置した、役割分担を与えたのでしょう。適材適所をよく見極めて構想したということです。そのように確信を得ることが出来ました。

人々はまさしく相対立する火かと水みの一つの力(か・み=神)を託して祈りの対象にしたということでしょう。往古からの天皇の祭祀さいしの縮図ということです。

もの・ことには一長一短、強弱などの両面を持ちます。この世の森羅万象は相対立する要素が同居し不離不可分を成して、正常に振る舞うのです。人間とても同じです、矛盾・撞着を一つにして生きる動物です。娑婆の欲得深い人間が、同じ現象に接して、こちらが正しい、いやあちらが正しいとして喧嘩しても永遠に決着が着くはずは無く、まったく、まったく無意味だということを気付かされます。

そのようなことを全部、全部織り込んで人々は祈って来たのです。

(3) ところで、

¹¹ 自然の地形地勢を上手に利用する聖域の構築に当っては設計したはずですが、設計者がいたはずですが、誰だったのでしょうか。

¹² 旧日影・旧中平集落の廃村・離村経緯の詳細は不明であるが、火災が主因とも云われており、丁寧に祀ったのに神頼みが効かなかったのだ、それはすなわち迷信云々ということでしょうか。そうでは無く、上記のとおり陰陽の世界故に隆盛もあれば、衰退もありで、時の運が巡り合せたというだけでしょう。

¹³ 神かみほとけに至れり尽くせりの儀式を以て祈りを捧げたのにも関わらず時々災厄ぬかが降って来ます。額づ

く人間の方に真心が入っていないのでしょうか、それとも、神仏が欲深いのでしょうか。

.....

いろいろと誇大妄想的に脱線もありましたが、このような想像力に着火させて貰った史跡とそれらの情報源となって頂いた関係者に感謝申し上げます。

振り返れば、旧『道智道』の道筋沿いに前記のとおり的一大聖地があり、中でも、【補完資料－1】内図 H1-13 のとおりの現社殿の前にある説明版の中に記載されている五行について発展的に捉えて見ました。【補完資料－1】の中で触れた陰陽五行説や易経の知識について少し齧ったので、その初歩・基本について記述します。なお、同説については、専門書が山のようにあり私の及ぶ処ではありません、については、基本を踏まえつつも、かなり私説（私見）を加え独自色で染め上げています。

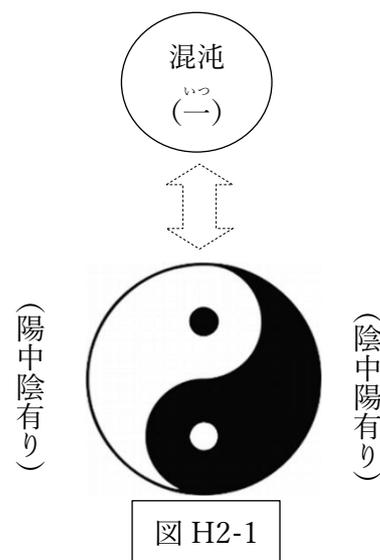
1. 『陰陽（魚眼）太極図』

この世の万物生成の初期過程を簡単に概念化（図化）したのが図 H2-1 のとおりの『陰陽（魚眼）太極図』です。何もかもが“一つ（全一的）”になっている「無・空」は混沌・混然一体（いつ＝ひとつ）から、初めに、『陰と陽』が生まれたとする考え方です。これが人間の知識となる「分ける、分けた」――分別知の始まりであります。世の中の諸々の現象、森羅万象の活動は変転極まり無く、人間の心（思念も感情）も絶えず変化し、一定していません。そのことは真逆の性質を有する『陰』と『陽』の二元がせめぎ合い（吸引反発、収縮膨張）をしているという観方です。その陰陽はあくまでも単一世界における両極であり、不離一体の相待・共存関係にあるとします。これは太古からの宇宙に貫徹する原理原則、自然の理法というものです。私は簡潔に言う場合は、

「そう たい相対・相待性陰陽原理」と称します。相対は対立・反発、相待は相待つ・吸引の意々です。この図の動きについて簡単に説明して見ます。黒色は陰を、白色は陽を表す。陰の頭部中央にある魚眼のような白色の点は陰中の陽種子を示し、陽の頭部中央にある魚眼のような黒色の点は陽中の陰種子を示している。黒色の陰は右側で下降する気を意味し、白色の陽は左側で上昇する気を意味する。魚尾から魚頭に向かって領域が広がって行くのは、それぞれの気が生まれ、徐々に盛んになって行く様子を表し、やがて陰は陽を飲み込もうとし、陽は陰を飲み込もうとする。陰が強まって極まれば、反発した陽（の種子）が勢力を増し陰は衰退に転じ、逆に陽が強まって窮まれば、反発した陰（の種子）が勢力を増し陽は衰退に転じることを表す。

(1) 「一極（ぜんいつ全一）二元の三律構図ワンセット」

陰陽説は、「一極（ぜんいつ全一）二元論」とも言われ、言い換えれば「陰陽同根（同根＝一つ）」であります。一方では「相反・対立」、他方では「糾合・逢引き」の両極の性質が「一つ」に内蔵しています。ぜんいつ全一は、「分別知」に対する『無分別智』の世界です。正と反が同根・同時進行なのです。よって「一つ」そのものには、もちろん陰陽、色付けはありません。宇宙の森羅万象のもの・ことの動静に作用と反作用が同時に生じています。世の中万事、77億人が寄ってたかって最高の知恵を結集して出し切った結論（判断）と雖も「唯一絶対」というもの・ことはありません、なぜならば、「陰陽同根に付き対極の種子有り、陽中陰有り・陰中陽有り、万物流転」だからです。まさに、正真正銘の「単一体両性具有」の理法の世界です。私は、陰中の陽と陽中の陰の魚眼は、実は離れた処にありながら、不離一体化に誘導するトリ



ガーポイント（自律的自操性変転萌芽の芯）の役割を果たしている
と見立てています。

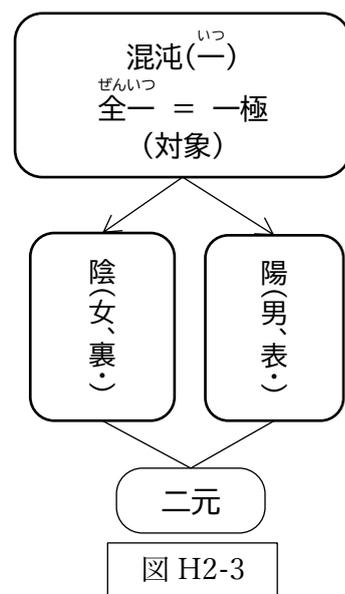
陰陽要素の一部事例を属性毎に図(表)H2-2のとおり整理して
見ました。この関係を一般化、抽象化したのが図 H2-3 でありま
す。以上について、私は、この世の^{もの・こと}は「一極（全一）
二元の三律構図を以てワンセット」とも称しています、中身の意
義は図 H2-1 と同じ意味合いです。

一極 (対象)	二元要素	
全一	陰	陽
状態	凹	凸
性	女性	男性
宇宙	地	天
幾何(前)	円・まる	方・四角
幾何(後)	方・四角	円・まる
天体	太陰(月)	太陽(日)
面	裏	表
倫理	悪	善
道徳	邪	正
曼荼羅	胎蔵界	金剛界
自転	夜	昼
数	偶数	奇数

図(表)H2-2

(2) 展開

人間そのものにも当てはまります。人間の認識は、このような
対抗する二元・二項のせめぎ合いの中で右往左往し、喜怒哀楽の
感情となって悩むのであります。喜怒哀楽は、喜と怒、哀と楽は
それ自体が相対です、ところが、そんなことを棚に上げ、それぞ
れが自身にとって都合の良い一方的な観方を絶対化・正当化しよ
うとします、だから感情が蒙昧します、争奪・対立が生じます。
人間の諸々の心のうごめきは、刹那の感情故に、その一時の感情
を以ていくら論じても一方の見方に落ち着かないのです。対立の一件落着は、
一見^{いつ}落着に見えたようで、実は妥協と譲歩の産物^{いつとき}に一時安住したに過ぎませ
ん。お互いに心の奥深くには“いつか仕返ししてやる！”が残ります。万物、陰
陽同根の生命体なのです。また、無機質の^{もの・こと}も陰陽同根の世界です。
陰陽の吸引反発、収縮膨張の作用は、陰陽の両面を欲しがりバランスを図ろう
とする一面があります。その動き・働きは、自称「帰一還元」（全一に帰り、
元に還る）の理法であります。人間界で謂えば、理想の境地を希求する精神作
用です。人間が穏やかさや安寧を自覚出来るのは、対立がない境地、つまり、
理想の境地、^{ぜんいつ}全一の境地にある時です。



(3) 「陰陽五行説」への発展

別々に発生した「陰陽説」と「五行説」が融合し、万物万象を解く理論に発
展しました。

「五」の起源については二つの見方が融合しています。

その1；東西南北の四方に中央を加えたものという考え方（東 - 木、南 - 火、中央 - 土、西 - 金、北 - 水）です。

その2；肉眼で観察が可能な五つの惑星、（水星・金星・火星・木星・土星）に淵源があるとする考
え方です。

地球周辺の宇宙の天空は、太陽（日）と月の二つの天体が主役
を成します。日は昼に光ります、月は夜に光ります。二つは対
比（対照・対称・対象）的^的です。それはすなわち日は陰陽の陽の象
です。月は陰陽の陰の象です。陰陽と五行の結合は「日、月、
木、火、土、金、水」と成って、曜日（7日間）の概念の基にな
りました。（図 H2-4） 月は日の光を受けて光ります、ここでは



図 H2-4

前者が従で後者が主です、日は遍く光を発散しますが、月無くして月は光を受け止められません、よって、月が光ということは今度は月が主で日を従とする見方が出来ます。日月の月日は陰陽と表裏です。

2. 五行の相生と相克

五行の各要素間には、相生と相克の関係が生じます、その構図を図 H2-5 に記述します。

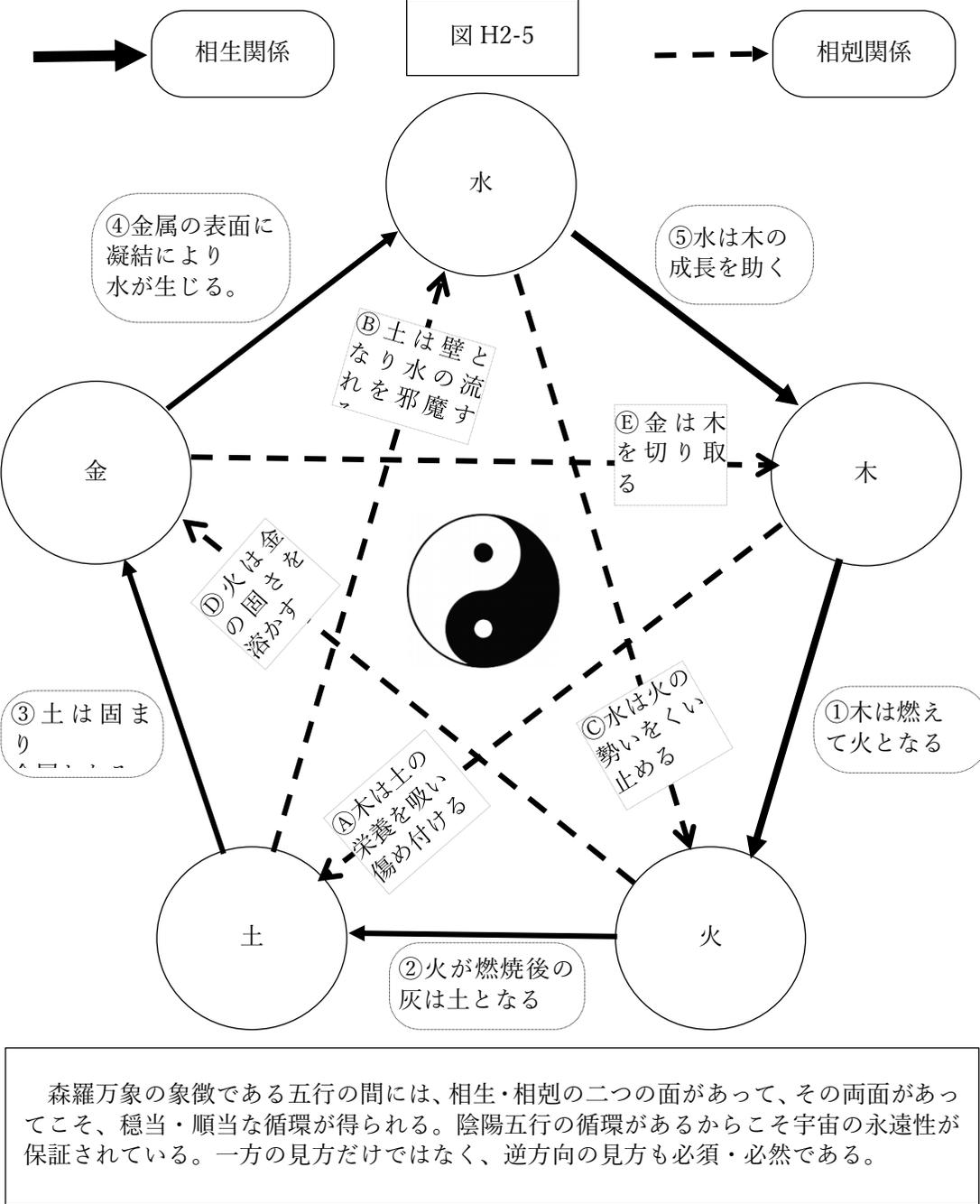
(陰陽)五行説の基本サイクルに反抗する (私説；▲)

▲；右相生の中にも相剋がある。

①!火の勢が増せば、木は早く燃え尽きる = 火剋木
 ②!燃え出た灰(土)が固まると、火の勢いが衰える = 土剋火
 ③!金属(鉱石)は土を変えて生る(土が減る) = 金剋土
 ④!水に長く浸たされた金属は錆びる = 水剋金
 ⑤!木を増やせば吸い取れる水が減る = 木剋水

▲；右相剋の中にも相生がある。

①!土は木の根が張れる状態を供する = 土生水
 ②!水は岩石を砕いて土を作る = 水生土
 ③!火は熱く水を蒸気に変える = 火生水
 ④!金属は火の勢いを殺す壁となれる = 金生火
 ⑤!木は柔らかく、金属で加工され易い(木は金の力を引き出す) = 木生金



(陰陽)五行説の基本サイクル (公説；◎)

◎；相生関係(肯定性)とは、相手を生み出して行く、陽の関係。

①木生火
 ②火生土
 ③土生金
 ④金生水
 ⑤水生木



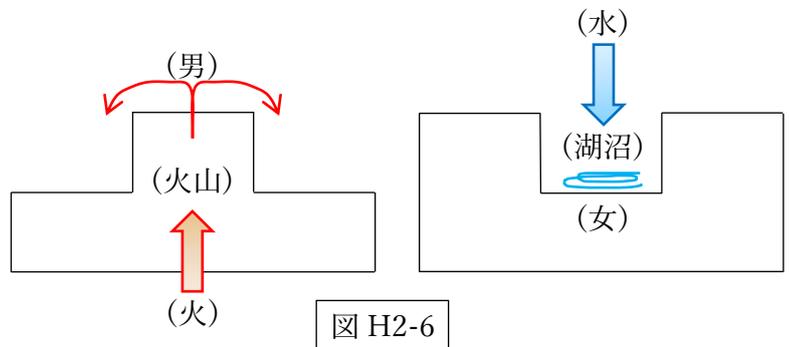
◎；相剋関係(否定性)とは、相手を打ち滅ぼして行く、陰の関係。

①木剋土
 ②土剋水
 ③水剋火
 ④火剋金
 ⑤金剋木

3. もう一つの「火と水」の関係（以下、しばらくこの順次で記述）

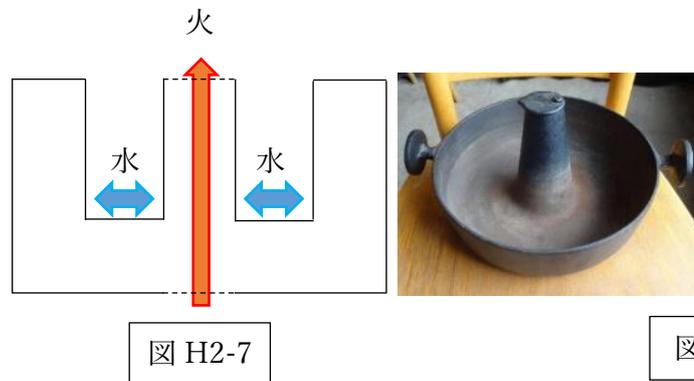
ある処に日本の「神」は「火と水ず」からとったものである、と書かれていたが、なるほどと思えます。単なるこじつけとは異なる意味深さを感じます。さて、以下、私見で想像・創作して見ます。

直感、原初的には、図 H2-6 にあるように火は男（凸部・陽・上昇垂直指向）に、水は女（凹部・陰・下降水平指向）に擬人化出来ます。地下から吹き上げたマグマは凸部の中央部を目指し、天に向かって伸びる性質を有します。他方、天から恵まれた雨（水）は、低いところ（凹部）を目指し、横に広がる性質を有します。



この凸の図柄を凹に横から移動・接着して合体させる、あるいは、凹に凸を下から合体させると、図 H2-7 のようになります。

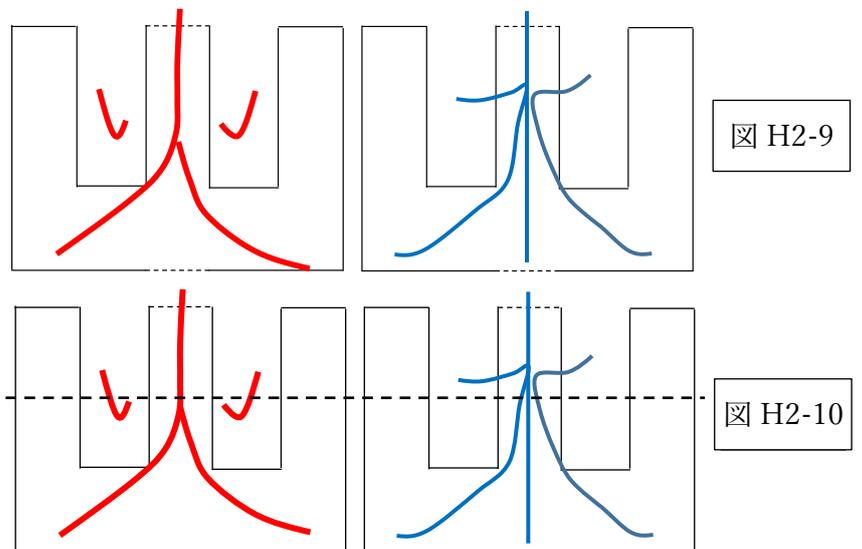
これを「山谷矩形図」と名付けます。凸を凹に直上からの合体では、余りにも露骨で人間臭いので、神（火と水）の世界では恥ずかしく隠しております。



これに類似の物に図 H2-8 の中国では、火鍋子と言う「しゃぶしゃぶ」の鍋があります。

見事です。中央の凸部内部には下からガスの炎（火）が立ち上ります。この構造（かたち）は火と水の真逆（相互相剋）関係——凸を裏から見れば凹であり、逆に、凹を裏から見れば凸である——にある性質を両性具有していることになります。

さらにことを進めて、図 H2-6 に「火と水」の文字を重ねて見たのが図 H2-9 です。今度は、その図 H2-9 に於いて、中央当りに横線を引いて、それより下を下半身、上を上半身に見立てたのが図 H2-10 です。下半身の中央縦ラインに視線を向けると、左の「火」は開いているから、凹様相女陰部の連想に進展し、右の「水」は、垂直棒が立っており、凸様相男根部の連想に進展します。



よく見ると、前段と後段では、火と水の性質が入れ替わった、反転したのです。何かの刺激圧力（ここでは凹凸スライド合体）を与えると変質するという事です。ということは、もともと裏側にその性質を有していた、それが表出したという

ことです。整理すると図 (表)H2-11 のとおりです。古代中国神話における、伏羲 (男神) と女媧 (女神) の交渉前後の反転と同様の事象です。人生山あり谷あり、喜怒哀楽の感情も凹凸、それはすなわち熱い火と冷たい水の絡み合い、吉凶は糾^{あざな}える縄の如しのとおりです。

「火と水」に「凸と凹」と「男と女」を持ち出す、異質のものと異形のを組み合わせる、合体させると、本来の性質とは異なったものが生み出される、大げさに言えば新たな生命誕生原理と解釈出来ます。矛盾では無いのです。「同質異形 (例えば、人間としては男と女は同じである

	前段(図 H2-5)	後段(図 H2-9)
	通常	刺激後
火	男	女
水	女	男
図(表)H2-11		

が、姿形は異なる)」と「同形異質 (例えば、図 H2-5 と図 H2-9 では同じ山谷矩形図姿に性体が異なる男と女が内包)」のものが転換・重畳し合う、とも解釈出来ます。もはや陰陽が混然一体となっています。前記、陰陽の基本説による「帰一還元」理法の自然作用からすれば当然のことです。

つまり、物事は本質において絶対的優劣を比較出来ないのです。優・劣に見えるのは相対関係で、かつ、一時の表層であって、さらに刻々と変化して行きます。陰と陽は、単体相互では一見衝突・対立関係を見せますが、「陽中陰あり、陰中陽あり」で、ある状態の固定が永久に保障されないのです。

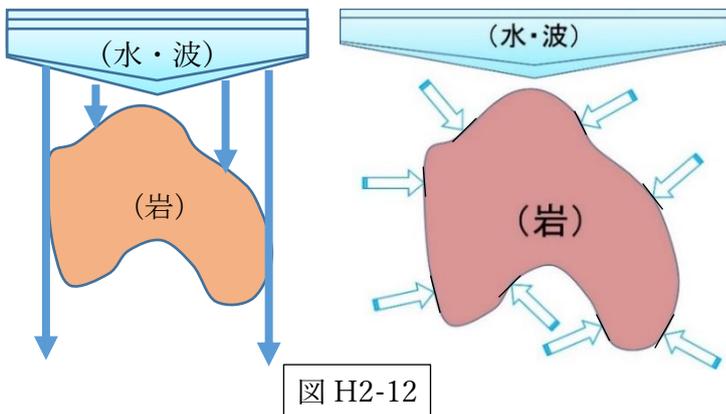
これらの陰陽の教えを思う時、ふと浮かぶことがあります。地球より重い人間という、霊長類最強の人間は、元々、相互に比較対象範囲外の存在・尊厳です。人間関係はあくまでも一局面での相対関係に過ぎません。ところが、裏で平然と他人の悪口を並べ立てる御仁がいます、自分は偉くもないくせに偉いと絶対視 (実は虚妄) し、錯覚・倒錯しているのです。そういう人、あるいは「世は盛者必衰、俺もいずれは死ぬ、だから嫌われてもいい」と開き直り、威張っている人の話には私は馬耳東風の姿勢、巧妙な面従腹背で対応しています。(余計なことでしたが。)

要するに、諸事万般、相対関係にあるものを「俺は“絶対”だ」と思う処は幻想に過ぎないのです、それに気付いて自嘲し謙虚に生きないと、様々な悪霊が絡み付きます。

.....

4. 水には面白い性格 (物理現象) があります。

岩 (障害物) に水 (波) が当たった時、水はどのような動きをするのか。図 H2-12 左のように直進する、すり抜けて行くと言うイメージではありません。同図右のように、岩の全周囲に、裏側まで隈なく回り込み、全ての面 (正しくは点) に於ける接線に垂直に当たるのです。別の言い方をすれば、全周囲の、ある接線に垂直に当たる全ての点を求めて回り込むと言う動きをするのです。この事から次の二つを学びます。



- ✓ 一つ目は、垂直に当たると言う事は、正々堂々真正面に立つと言う事です、相手の思想信条の如何を問わず、真摯に真っ向対峙です、後ろから鉄砲を打つような事はしません。つまり、本人の居ない処で誹謗中傷の悪口・陰口を叩かない事です。

- ✓ 二つ目は、裏側、全周囲に回り込むと言うのは、先入観で他人の一面だけを見て全体を見た如く軽々しく人物評価はしないと言う事です。能力を表に出さない人、「能ある鷹は爪を隠す」人が沢山いる可能性があり、それを探し出そうとする姿勢こそが人付き合いにはとても大事です。

5. えつきょう 易経も視野に

陰陽五行説は、易経とも習合しています、その訓えを寄せ集めて私的に簡略化した歴を図 H2-13 のように記述しました。易経も「陰陽」を原初の起源とするものです。

【陰陽五行（易経と習合）の基本形】

図 H2-13

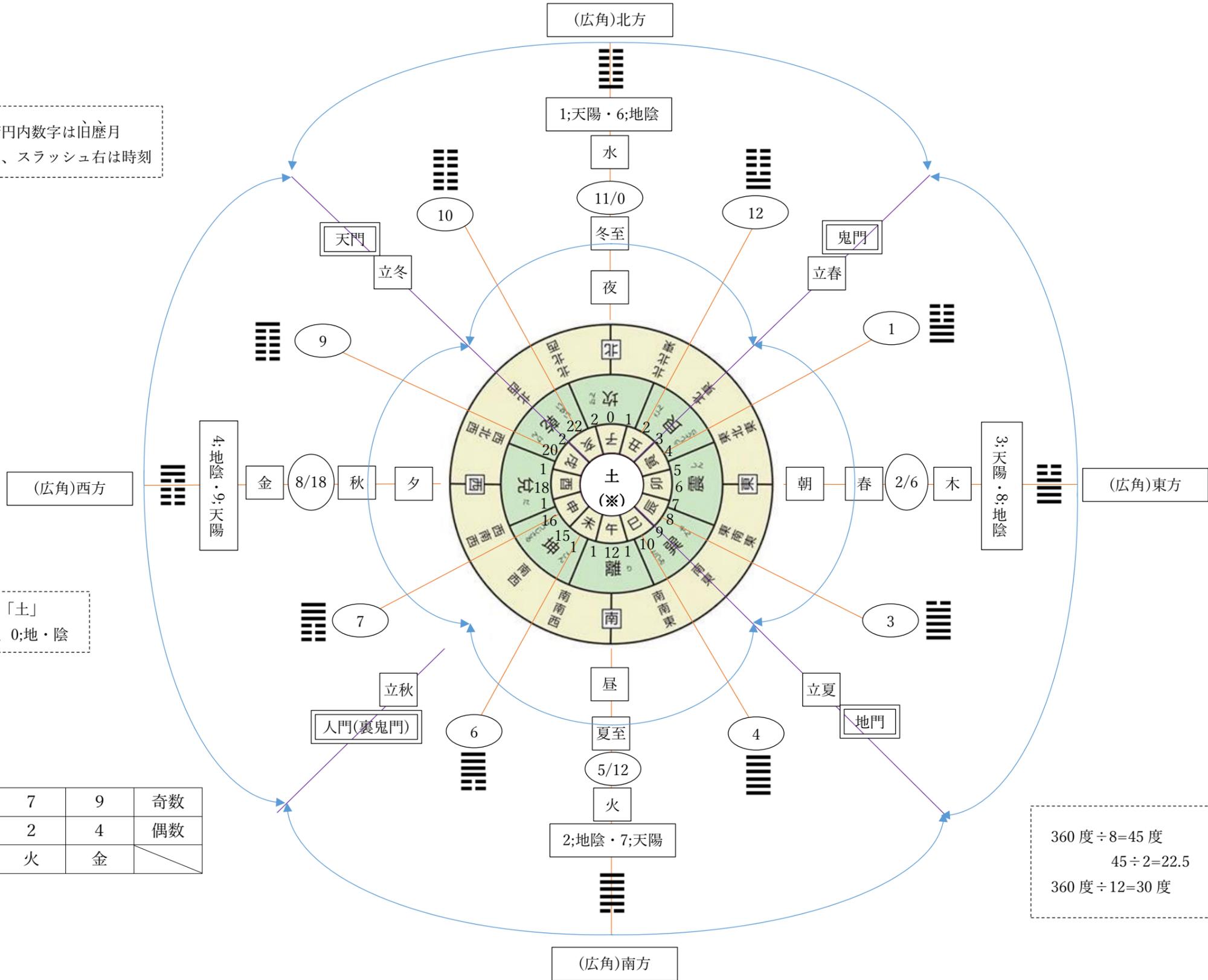
たいつ たいきょく
太一・太極 = 北極星

楯円内数字は旧暦月
ただし、スラッシュ右は時刻

(※)「土」
5;天・陽、0;地・陰

天=陽	1	3	5	7	9	奇数
地=陰	6	8	10	2	4	偶数
五行	水	木	土	火	金	

360度 ÷ 8 = 45度
45 ÷ 2 = 22.5
360度 ÷ 12 = 30度



【 補完資料－3 】 月山～旧道智道の古今風景（替え歌）のこと

最後に、歩きながら浮かんで来たつたない詩を、私の大好きな讃美歌『山路越えて』の曲に乗せた替え歌を作ったが、図 H3-1 のとおりです。

月山～旧道智道の古今風景 (原曲「山路越えて」讃美歌404番)

1	つきの	おやまの	ひがし	ふだら	く	ぼうじょう	はお	おい	の	こんごう	か	い	よ
	つきの	おやまの	にし	ふだら	く	ふたま	た	な	が	れ	は	たい	ぞう
2	どうち	しょう	にん	あ	さ	から	ばん	ま	で	く	さ	き	を
	こ	ん	な	や	ま	に	よ	く	ぞ	ひ	ら	い	た
3	どうち	の	おも	い	を	い	ま	よ	に	お	こ	し	
	は	く	い	に	つ	つ	む	ぎ	ょ	う	じ	ゃ	の

- 一、月の御山の東補陀落
棒状は大岩の金剛界よ
- 月の御山の西補陀落
二股流れは胎蔵界よ
- 二、道智上人朝から晩まで
草木を払って岩石削る
- こんな山によくぞ開いた
湯殿の御山へ導く道を
- 三、道智の思いを今世に起し
咲かせる力で未来へ繋ぐ
- 白衣に包む行者の姿
修験者心を永遠へと繋ぐ

図 H3-1

(つたない みそひと・もじ)

“ 月山の東西補陀落と座す金胎香りが淡しく沁みる ”

“ 道智と二人で歩いた山の道神祇諸仏がこの背を押しぬ ”

“ 白鷹の皆の力を貰い受け道智の道を楽しく歩く ”

“ たたずむ雲の日傘を眺むれば残り陽暑さは恥ずかしげ ”

置賜から出羽三山へ 難所続く参詣道



「道智道」を踏破

2015(平成27)9/6(日) 山形

2日かけ白鷹、西川、鶴岡の有志

往時の苦勞、追体験

白鷹町と西川町、鶴岡市の有志が、「道智上人」が開いたとされる置賜から出羽三山への参詣道「道智道(どうちみち)」を2日間かけて歩き通した。同行程を歩いたという最後の記録は1967(昭和42)年。荒れた山道や沢越えなどいくつもの難所を体験しながら、かつての山岳信仰の熱に触れた。

置賜地方と湯殿山を結ぶ道智道は室町時代の応永年間に開削されたと伝わる。現在なら、白鷹町黒鴨から朝日町、西川町を経て月山を回り、鶴岡市田麦俣の湯殿山に出るルートだ。かつては出羽三山への参詣道として多くの人が行き交い、湯殿山別当四方寺の大日寺があり宿坊が軒を連ねた西川町大井沢は「湯殿まで笠の波打つ大井沢」と歌にまで詠まれた。

往時の道を歩いてみたい。部分もあるが山中は通ると、白鷹町内の有志が去年、人もなくやぶに覆われ、沢2度にわたってルートを調査。林道などと重複している。今はない。一部区間の刈り



道智道を歩いて湯殿山を目指す一行＝西川町大井沢

払いを行うなど準備を行い、8月29日から1泊2日の日程で、約半世紀ぶりの踏破に挑んだ。初日は9人が参加。午前5時前に出発し、雨中を約12時間かけて歩き西川町大井沢に到達した。朝日町の山中、茎の峯峠―木川間は特に難所の連続。踏み跡が消えた古道をたどり、朝日川をはじめ複数の沢を渡った。2日目は途中合流者も含め8人が月山の山腹を通って最終目的地の湯殿山に着いた。所要時間は約10時間だった。

事業を企画した白鷹町山岳会事務局の伊藤隆さん(61)は「同町荒砥は一分岐点に置かれた道しるべの石や石塔、ブナに刻まれた落書きなどから当時の人々の存在を感じることができて意義深かった」と、出羽三山詣での苦勞を追体験し充実した様子。一方で「山中は案内人がいなければ分からないほど道が荒れていた。現在より、昔の方が歩きやすかっただろう」と話した。

図 H4-1

思わず「これだ、すごい、・・・私も歩きたい・・・」となりました。

湯殿山へ 古道踏破

白鷹から2日間 山岳信仰に思いはせ

2016(H28) 8/25(木) 山形県

有志10人

道智道の踏破に向け出発する有志―白鷹町黒鴨



白鷹町などの有志が20、21の両日、室町時代に「道智上人」が開削したとされる置賜地方から出羽三山への参詣道「道智道」(どうちみち)の踏破に挑み、歩き切った。昨年に続く挑戦。今や人々の記憶からも消えつつある古道を踏み締め、山岳信仰の労苦と情熱を追体験した。

白鷹、西川両町と長井市から30〜60代の10人が参加した。白鷹町黒鴨から朝日、西川両町を通り月山、鶴岡市田麦俣の湯殿山へと続く、直線距離で40キロほどの行程。20日午前5時、ほら貝の音を合図に始動した。1〜1.5メートルほど草が伸びた林道や、大木が根こそぎ倒れ道をふさぐ場所もある「いばらの道」。沢は水かさの少ない上流部を選んで渡り、無数のアブにまわり付かれる場面もあった

た。21日は西川町大井沢の民宿をたち、月山の山腹を通って湯殿山に到着。両日とも10時間を超える大行脚だった。

企画者の一人で白鷹町史談会の丸川二男会長(67)は「古道の踏破に挑むことで

老夫婦、祭りの若衆
豊かな表情の写真
高畠・阪野さん回顧展

再び人々が関心を寄せるきっかけになれば」とし、「使われることが少なくなった旧道は災害時の迂回(うかい)路になり得る」として再整備の必要性を強調。

初めて参加した長井市立図書館の倉持宏幸館長(61)は「沢渡りでは清流に癒やされた。昔の人もここで安息し、水場にしたと思うと感慨深い」と語った。

図 H4-2

白装束、法螺貝の姿・出で立ちからして、まさに湯殿山修験者・行者の再現・再来です。

ところで、ふと思ったのですが、黒鴨からの旧「道智道」は、白鷹町、朝日町、大江町、西川町の4町の管轄区域を通過するが、係り方においては白鷹と西川は真に熱心であるが、朝日・大江はどうなのか?とと思いました。濃淡は世の常ではあるが。

やぶから出現 7 石碑

2016(428) 8/26(金) 山新



やぶの中から見つかった石碑群。調査する(左から)伊藤隆さん、江口儀雄さん、丸川二男さん



伊藤さんは昨年10月、黒離で約1・4キロ、小高い山史談会長の丸川二男さん(67)と同会顧問の江口儀雄さん(68)の協力を得て今月5日までに計4回、入山して調査。地元住民からの聞き取りも行った。

山の頂の標高は約5800メートル。繁茂する草木を刈ると、一段高い平地(約400平方メートル)になっており、石碑は端の方に南向きで横一列に並んでいた。1861(文久元)〜1921(大正10)年に建立されたことが碑に

白鷹 社殿あった山中、大正までに建立

白鷹町黒鴨の山中のやぶから突如、七つの石碑が姿を現した。キノコ採りをしていた白鷹山岳会の伊藤隆さん(62)が偶然見つけた。辺りはほぼ手入れされることなく、生い茂る草木に歴史は埋もれつつあった。町の石造文化財調査でも把握されておらず、伊藤さんや町史談会の会員らは「できるだけ当時の信仰の様子を解明し、後世に残したい」と話している。

発見の伊藤さん「当時の信仰解明したい」

記されており、大きいもので高さ10・5メートル、幅65センチ。「大神宮」「金毘羅(こんぴら)山」「金華山」などと彫られた信仰碑で、五穀豊穡(ほうじょう)や火伏せ、商売繁盛を願い建立されたとみられる。

黒鴨の住民の話によると、石碑前にかつて社殿があり、伊藤さん手持ちの「大日本帝国陸地測量部」の地図(大正期発行)にも記されていた。社殿は戦前に鮎貝地区、その後下山地区の道の駅白鷹ヤナ公園の駐車場北側に移設され、現存している。石碑前に社殿があった頃は参道に赤い鳥居が幾つも立ち並び、多くの参拝者が訪れたという。

石碑建立は、冬に馬そりで石を運搬する多大な労苦を伴う作業だったと思われ、「信仰心の強さの表れだろう」と丸川会長。歴史を知る人が高齢化する中、「情報提供してほしい」と協力を呼び掛けている。連絡先は丸川会長0238(85)3440。

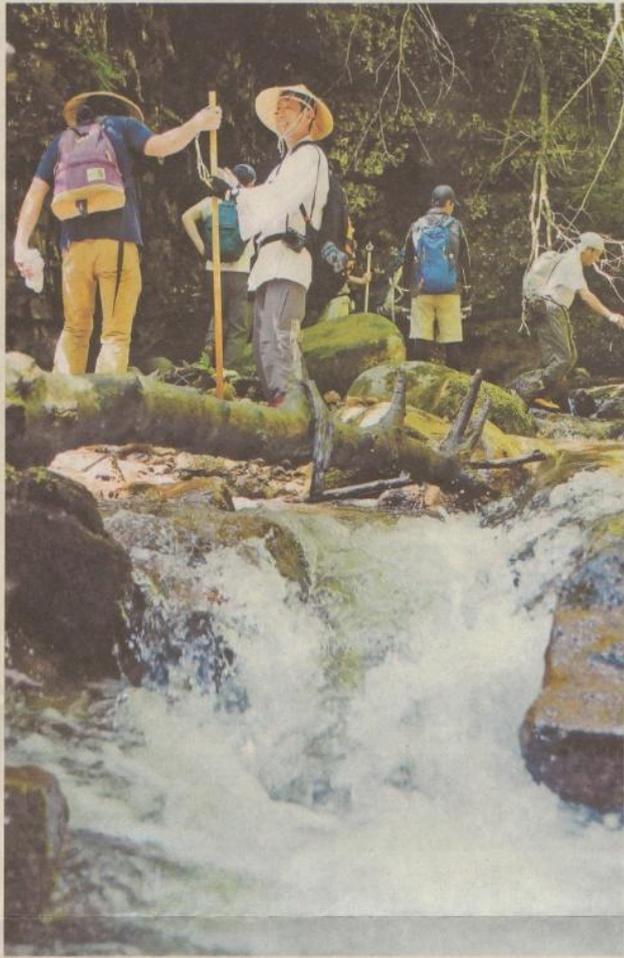
図 H4-3

この記事から、私の行動を発展的に推進する内発的衝撃を受けました。全容を早く解明されることを期待しております。

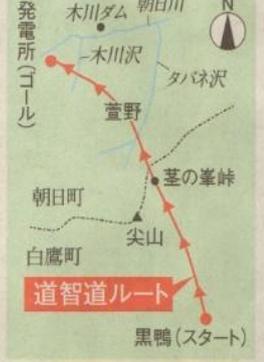
ルポ 置賜から出羽三山への参詣道

「道智道」を歩いて

2017(429)7/10(月) 山新



清流が流れ注ぐタバネ沢。参加者は慎重に歩を進め、沢を渡った⑥道端には、飛んでくる虫たちを優しく迎え入れるようにヤマアジサイが咲いていた



「道智上人」が開いたと伝わる置賜から出羽三山への参詣道「道智道（どうちのみち）」が、かつて山岳信仰の道として多くの人が行き交った道に再び光を当てようとする地元有志が3年前から道を踏破する催しを続けている。今年も白鷹町黒鴨から朝日町の朝日川までを歩くという。どんな道か確かめたい。催しが開かれた9日、同行取材を試みた。

白鷹↓朝日 有志に同行 歴史や景色 体験してこそ



道智道は室町時代に開削されたといわれる白鷹町黒鴨から朝日町、西川町を経て湯殿山、月山、羽黒山に向かうルート。長らくやぶに覆われていたが、白鷹町史談会会長の丸川一勇さんら有志が下刈りし整備。2015、16年と賛同者を募り、今年も黒鴨から朝日川の発電所まで約20キロの行程。午前6時、ほら貝の音が響く中、白鷹町内外の男女21人が歩き出した。数日前の雨のせいか、湿り気を帯びた空気が頬をなでる。立ち並ぶ木々が夏の日差しを和らげ、道端に咲くヤマアジサイがひとときの涼を与えてくれた。

朱色のホオズキ 本堂を鮮やかに 浅草寺 鮮やかな朱色のホオズキが並び、江戸風鈴の音色が鳴り響く恒例の「ほおずき市」が9日、浅草寺（東京都台東区）で始まった。写真。10日まで。

白鷹、朝日町境にある室の峯峠からの道中には幾つもの沢が待ち構えていた。朝日川支流のタバネ沢では、清流が岩間を流れ下り、しぶきを上げていた。一行は浅瀬を選び、支え合って沢を渡る。記者も沢に滑り落ちそうなる不安をこらえ、石に飛び乗る。久々に味わう感覚に心が躍った。道脇には杉などの大木が

点在。聞けば、かつての修験者や林業従事者の道しるべだったという。最終盤、木川ダムに近い木川沢では、道の衰退を象徴するかのようにつり橋が崩れ落ちていた。橋下を流れる川水をすくい、汗にまみれた顔を何度も洗う。修験者もこの水辺で疲れを癒やしたのだろうか。あまりの気持ち良さに、川に飛び込みたい衝動に駆られた。 全員無事にゴールした。白鷹町出身で仙台市泉区の会社員菅原和也さん(31)は「先人が歩いた道を、時を経て自分が歩いていると思うと幸せ」と笑顔を見せ、丸川さんは「歩き続けることで道を次代に伝えたい」と語った。記者にとって初めての道。歩くことでしか知り得ない歴史や景色がそこにはあった。 (長井支社・木村敏郎)

図 H4-4

発電所への迂回路が整備されており、旧吊橋崩落地点の渡渉回避が可能となりました。

(end)